

思弁的实在論と現象学についてのノート

Remarks about Speculative Realism and Phenomenology

岩内 章太郎

Shotaro IWAUCHI

大阪経済法科大学 21世紀社会総合研究センター 客員研究員

早稲田大学 国際教養学部 非常勤講師

目次

第1節 現象と物自体

第2節 対象について

第3節 本質について

キーワード：思弁的实在論・オブジェクト指向存在論・現象学

思弁的实在論は、2007年、ロンドン大学ゴールドスミス校で開かれたワークショップに始まる。登壇者は、レイ・ブラシエ、イアン・ハミルトン・グラント、グレアム・ハーマン、カンタン・メイヤスーの四人であった。そのワークショップのタイトルが「思弁的实在論」である。

ブラシエ、グラント、ハーマン、メイヤスーは、それぞれ独自の哲学を展開して、互いに激しく対立しながらも、人間の認識とは独立にある实在の本性を探究しようとする動機を共有している。

思弁的転回から10年以上が過ぎた現在、最初期の盛り上がりには比べると、思弁的实在論は一定の落ちつきを見せている。すでにブラシエやメイヤスーは「思弁的实在論」の看板を外し、実質的には、ハーマンのオブジェクト指向存在論が運動を牽引している、という状況である。

しかし、だからといって、实在論は一過性のブームだったわけではない。まず、思弁的实在論は、建築学、アート、環境学、人文学など多方面へ大きな影響を与え続けている。さらには、チャールズ・テイラーとヒューバート・ドレイファスの多元的实在論、マルクス・ガブリエルの新しい实在論がある。全体としては、「实在論」のプレゼンスは高まっているのではないだろうか。

これまでに筆者は、いくつかの研究において、現代实在論の全体像の把握に努めるとともに、現代实在論と現象学の関係を考察してきた¹。特に、現象学を相関主義かつ信仰主

義とみなす思弁的实在論の現象学批判については、エトムント・フッサールの現象学の立場から、その批判の妥当性を考察してきたが、思弁的实在論が現象学から受けている影響については、よく考えてこなかった。本稿は、思弁的实在論と現象学の影響関係に関する包括的研究を準備するための研究ノートである。

まず、思弁的实在論と現象学の発想の違いを確認する（第1節）。そこには实在論と観念論の対立が反映されているが、現象学は、観念論と实在論のあいだの信念対立に終止符を打つための立場である、ということをはっきりさせておこう。

つぎに、オブジェクト指向存在論とフッサール現象学における「対象」を考察する（第2節）。ハーマン自身も認めているように、オブジェクト指向存在論はフッサール現象学の対象概念から大きな示唆を得ている。が、オブジェクト指向存在論における対象は、フッサールのそれとは性格を異にする。

最後に、現象学の「本質」が、オブジェクト指向存在論の「実在的性質」に変貌するとき、何が新しく獲得されていて、逆に、何が失われてしまったのか、を考察する（第3節）。本質概念の捉え方に、フッサールとハーマンのモチーフの違いがよく表れているのである。

第1節 現象と物自体

イマヌエル・カントは、現象と物自体を区別して、人間の認識を現象の領域に限定した。物自体を思考することはできるが、認識することはできない。このカントの立場を「相関主義」と呼んで批判したのは、思弁的实在論の初期メンバーの一人、カントン・メイヤスーである。メイヤスーはつぎのように述べる。

私たちが「相関」という語で呼ぶ観念に従えば、私たちは思考と存在の相関にのみアクセス [accès] できるのであり、一方の項のみへのアクセスはできない。したがって今後、そのように理解された相関の乗り越え不可能な性格を認めるという思考のあらゆる傾向を、相関主義 [corrélacionisme] と呼ぶことにしよう。そうすると、素朴实在論であることを望まないあらゆる哲学は、相関主義の一種になったと言うことが可能になる²。

メイヤスーによると、カント以後の哲学は、素朴实在論に陥ることを回避するために、現象と物自体の枠組みを共有した。人間は思考と存在の相関関係にのみアクセスできるのであり、その相関性の外部に出ることはできない。思考と存在の相関性の乗り越え不可能な性格を承認するすべての立場を、メイヤスーは相関主義と呼ぶのである。

現象と物自体を峻別する相関主義は、認識論的に強い説得力を持つ。人間が認識する現象を越えた物自体を擁護しようとする、以下のような循環に巻き込まれるからである。

Aが「人間は物自体を認識できる」と主張する場合を考えてみよう。この場合、A自身

が物自体を認識したことがある、A以外の誰かが物自体を認識したことがある、あるいは、これまでに物自体は認識されたことはないが、これから物自体は認識される可能性がある、などいくつかのパターンが想定されるだろう。

ところが、いずれの場合でも、物自体は誰かに認識されている。だとすれば、それが特定の誰かに対して現われていることは疑いえず、物自体の認識は、認識された瞬間に、物自体の概念の認識になってしまう。思考から独立した存在は、それを思考するという行為を通じて、人間の思考と絡み合ってしまうのである。相関主義の循環に巻き込まれることなく、物自体を認識するのは簡単ではないのだ。

フッサールは、カントによる現象と物自体の区別を引き受けるが、認識論的にもう一步、相関主義を押しすすめる。カントが物自体の思考可能性を残したのに対して、フッサールは、意識への所与を超越する物自体、客観、実在に関する存在判断一般を保留する。この手続きは「エポケー」と呼ばれる。

エポケーは古代ギリシアのピュロン主義に由来する概念であるが、フッサールにおけるエポケーは、ピュロン主義のそれとは異なる目的のために遂行される。ここで詳述することはできないが³、ピュロン主義におけるエポケーは、理論的な側面と実践的な側面を含む。理論的には、対象の本性を独断的に規定せずに探究を継続するために、実践的には、心の無動揺と節度ある情態を獲得するために、ピュロン主義者は、対象それ自体が何であるかについての判断保留に至る。そこに認識の相対性を乗り越えて普遍性を獲得する意図はない。

それに対して、フッサールは、普遍認識の可能性をきりひらくために、方法的にエポケーを遂行する。すなわち、世界が現実に存在し、私も事物も他者も現実世界に存在しているという素朴な存在定立を「自然的態度のなす一般定立」と呼んで、それを遮断するのである。フッサールは『『イデーンI』へのあとがき』において、エポケーの意味をつぎのように述べている。

つまりこの場合（エポケーを遂行した場合）、一方において、この世界に関する、すなわち、われわれにとって絶えず全く問題なしに存在するものとしてあらかじめ与えられているこの世界に関する、自然的経験にもとづく一切の判断は、排除せられる。したがってまた、一切の実証的諸学問も、排除せられる。実際、実証的諸学問は、自然的世界的経験を、確証の源泉としていて、その上に成り立っているからである。実証的諸学問のうちには、もちろんのこと、また心理学も入ることになる。他方において、あのエポケーによって、「純粹に、そのものとして見られたかぎりにおける、意識世界」という全般的現象に対する、視界が、自由に開けてくるのである。すなわち、意識世界は純粹に、多様に流れ去りゆく意識生活のうちで意識されたものとして、捉えられることになる⁴。

ここで主張されているのは、一見すると、きわめて逆説的な事態である。自然的経験にもとづく世界の実在に関する判断を保留することで、自然的態度における現実世界のみならず、自然的態度で行なわれる実証的学問のすべての成果が、現象学的探究から除外される。すると、現象学は世界を喪失してしまったかに見えるだろう。

ところが、フッサールによると、純粹意識体験の領野は無限に開かれているのであって、世界は意識に与えられたものとして、捉え返されることになる。すなわち、世界が客観的、現実的、実在的に存在する、と素朴に判断するのではなく、意識体験でそれらの意味がどのように構成されるかを洞察するのが現象学である、というのである⁵。しかも、現象学は意識体験に現われる対象や領域を単に記述するだけでなく、その普遍的本質の獲得を目指す普遍主義である。懐疑主義としてのピュロン主義とは異なり、意識から出発して、普遍性に向かうのだ。

こうして、現象と物自体の構図は、現象学的探究においては不要となる。一切の存在は超越論的主観性との相関関係におかれて、物自体については、判断が保留されるからである。現象学はその考察を意識に対する所与、すなわち「現象」に限定するのであり、意識体験の外部に存在するかもしれない実在を考えない。換言すると、現象学は物自体を考察の対象から外すのである。

思弁的実在論の現象学批判は、まさにこの点に向けられる。すなわち、現象学は相関主義である、というのだ。トム・スパロウは次のように論じる。

したがって、現象学的領野は与えられたものの意味しか扱えないのであって、実在的に存在している、あるいは形而上学的に実在しているものとしての——それが神、自我、数学、自然法則、物質等々に関わらず——与えられたものは扱わないのである。…（略）…現象学者は単にこの実在性の自律性を認めることを拒否するのである。あらゆる認識論的探究はこの拒否から始まらなければならない⁶。

現象学は存在を超越論的主観性との相関性において捉えるのだから、存在は超越論的主観性にとって現われる対象でしかなく、物自体の存在性格を失っている。現象学者は、実在が認識者とは独立に存在することを認めない。こうして、現象学は実在についての不可知論に陥る。

オブジェクト指向存在論によって、思弁的実在論を牽引するグレアム・ハーマンはこう書いている。

独立的な自然界を哲学の外に追いやってしまったことで、フッサールが払った代償は非常に大きいものだ。自然界を括弧に入れることは、容赦ない観念論者の振る舞いだからである。フッサールの信奉者が、意識は決して孤立した実体ではなく、観察や判断、憎しみや愛といったその志向的作用を通じて、みずからをつねにすでにその外部

へと向けているのだと主張したところで無駄である。現象学において、そうした対象は意識からの自立性をもたないからだ⁷。

エポケーという操作を遂行することで、すべての対象は意識からの自立性を失う。現象学者は、いかなる対象が実在するのか、と問うのを止めて、対象の実在は意識でいかに構成されるのか、を志向的に分析する。結果として、現象学は観念論の限界を突破することができず、実在あるいは物自体の本性は、未決のままに持ち越されてしまうのである。

まとめよう。現象学は物自体についての判断を保留して、意識体験の本質構造を分析する。実際には、エポケーは認識論的動機に支えられているのだが、思弁的実在論から見れば、これは観念論的相関主義のふるまいにすぎない。実在への道は塞がれて、人間は人間の認識に閉じ込められる。現象学は不可知論であり、メイヤサーの表現を借りれば、それは「信仰主義」である、ということになる。

第2節 対象について

現象学は存在を意識体験に還元するが、思弁的実在論は意識体験から独立した実在の本性を思弁する。フッサール現象学における対象は、つねに意識作用と相関的な意識対象であり、それは「志向的对象」と呼ばれる。

したがって、観念論と実在論の深い対立に鑑みると、現象学と思弁的実在論の対象概念は、互いに相容れないのが当然であるように思われる。しかし、ハーマンは、フッサールを「対象指向の観念論者」と呼び、つぎのように論じる。

二〇世紀の哲学の偉大な諸学派の中であって、現象学とは、フッサールが創始し、ハイデガーが発展させた学派である。この運動の核心には、注目すべきパラドックスがある。というのは、現象学は「事物そのものへ (to the things themselves)」の回帰を標榜していたにもかかわらず、フッサールとハイデガーはいずれも観念論者として非難されてきたからである。たしかに、この二人の思想家は、全てを人間にとってのアクセス可能性の問題としてしまったように思われる。人間を超えたところにある外的世界は、彼らの思想において大した役割を担っていないからだ。しかし、現象学には、バークリにも、あるいはヘーゲルにさえ見出すことができないような、ある種の実在論的な趣があることは否定できない⁸。

現象学は、事象そのものへと還帰することを目指すのが、そこで語られるすべての事象は、人間にとって現象するものにすぎない。人間の認識の外側の世界は、現象学の主題にはならない。だとすれば、現象学は相関主義、ハーマンの言い方では、「アクセスの哲学」になる。

ところが、ここでハーマンは、バークリやヘーゲルの観念論には見られない「ある種の实在論的な趣」を現象学に見出している。その趣の内実は具体的に展開されない。しかし、少なくとも、ハーマンの現象学解釈は、志向的对象を实在論的に向けかえたものである、とすることはできるだろう。すなわち、オブジェクト指向存在論のオブジェクト（対象）は、現象学の影響を受けているのである。いくつか、引用してみよう。

フッサールの現象的な領野は、むしろ、対象と対象がそれを通じて現れる内容との闘争によって引き裂かれているのである⁹。

志向的对象というのはつねに必要以上に具体的な仕方で、つまり、様々な偶有的な特徴で覆われた状態で現れるものなのであって、そうした特徴は、私たちにとっての対象そのものの同一性を変化させることなく除去することが可能なのである¹⁰。

現象的な領野は、外界へのアクセスから切り離された観念論者の牢獄ではない。むしろそれは、志向的对象と絶えず変化するその性質との間にある緊張を示しているのである。しかし私は、「志向的」という用語の無菌的な不毛さを避けるため、同義的な表現として感覚的对象（sensual object）という用語を用いることにしたい¹¹。

興味深い解釈である。たしかにフッサールは、事物知覚の一面性を「射映」と呼び、経験が進行するにしたがって、それぞれの射映が変化しても、「志向的对象」は同一のままにとどまる、ということ进行分析している。

たとえば、机の上のリングを見る場合、そのリングの知覚は、必ず一面的にしか与えられない。机の左右に回ってみても、そのつどの射映が見えるだけだろう。にもかかわらず、対象としてのリングは、一つのリングとして連続的に調和しつつ同一性を保っている。そのつどの射映は異なるが、それらはすべて同一のリングについてのものである、ということだ。逆に言えば、意識への対象の所与を通じて、対象が何であるかが構成されるのであり、意識は志向的に対象に関係する。

しかしながら、ハーマンは、射映と志向的对象は闘争によって引き裂かれている、と見る。志向的对象は、偶有的性質（射映）によって必要以上に飾られており、それらの性質を取り除いても、対象の同一性は保たれる。射映と対象は、別々のものとして分けられている。

こうした見解は、フッサールの洞察と矛盾しないように思われるかもしれないが、ハーマンは、まったく異なることを言っている。フッサールは、意識作用と意識対象は志向的關係にあり、事物知覚では、射映を通じてのみ対象に関係することができる、と論じる。すなわち、事物知覚の本質構造として、射映を取りだすのである。それに対して、ハーマンは、射映と対象が引き裂かれていると考えて、対象の同一性を損なうことなく射

映を取り除くことができる、とする。両者は似て非なるものである。

ハーマンは、志向的対象を「感覚的对象」と呼び、「実在的对象」と区別する。感覚的对象は、人間を含めた他の対象に対して現われる対象性であるが、実在的对象は、他のいかなる対象からも不断に退隠する、決して現われることのない対象性である。

現象学的な対象は、体験における志向的な相関者である。すなわち、それは意識作用と相関関係にある内在的かつ志向的对象である。しかし、ハーマンは、射映と対象のあいだに闘争を認めることで、感覚的对象を意識作用から切り離してしまう。この点で、現象学から見れば、感覚的对象は——意識への所与を超えたものとして措定されるのだから——すでに超越的かつ実在的对象であるが、ハーマンは、いわばもう一段階実在のギアをあげること——すなわち、観察者がアクセスすることのできない対象の実在の本体を想定することで——感覚的对象とは区別される実在的对象という概念を提起するのである。

第3節 本質について

フッサールは、偶然的かつ個別的な「事実」と必然的かつ普遍的な「本質」を区別して、つぎのように述べる。

さしあたりまず「本質」ということによって表示されていたものは、或る個物の自己固有の存在のうちその個物の何であるかとして見出されるものであった。ところで、このように何かと問うて見出されてくる内実はどうなるものであれみな、「その姿を理念的に観て取るありさまの中に置き入れ」られることができるのである。経験的もしくは個的直観は、本質直観（理念を観て取る働き）へと転化させられることができるのである¹²。

すべての事実は、それが何であるかを表す本質を持つ。個物は特有の意味内実を持つのである。事実に対応する直観は「個的直観」、本質に対応する直観は「本質直観」と呼ばれるが、現象学において、二つの直観は、理性的認識の正当性の源泉とみなされる。

フッサールによると、本質は直観を通じて直接に見てとることができる新しい対象である。ならば、対象が何であるかを規定する意味内実、直接意識に与えられる、ということになるだろう。

したがって、本質直観を通じて獲得される本質は、「超越的本質」ではなく「内在的本質」である。端的に言えば、現象学者が洞察する本質は、プラトンのイデアのように、この世界を超越して実在するものではなく、意識体験で見出される内在的な対象である。本質についても、フッサールは、エポケーと現象学的還元原則を遵守して、考察の対象を内在に限定している。

ところが、ハーマンは、本質を「実在的性質」とみなして、観察者に現われる偶然的な

感覚的性質（射映）と区別する。ここで注目すべきは、対象が何であるか規定する実在的性質、すなわち「対象の形相的特徴というものは決して、知性を通じて現前させられるものではなく、芸術であろうと科学であろうと、ただ暗示（allusion）という間接的な手段によってのみ接近可能なものである」¹³とハーマンが主張することである。

対象の場合と同様、ここでもハーマンの現象学解釈は、意識体験を超えたものに向かう思弁によって支えられている。ハーマンは、人間の認識ではアクセス不可能な領域へと、本質を再び追いやっている。

知という普通の道具は、私たちが対象を狩り出そうとするとき、ほとんど助けにならない。なぜなら知は、対象を、それに属するいくつかの検証可能な特性に置き換えるためのものであり、私たちに対象そのものを与えるものではないからである。また、これは間接的にのみなされる¹⁴。

知によって対象そのものを思弁することはできない。知は対象を検証可能な性質に置き換えてしまい、それを歪めてしまうからである。思弁的实在論の立場では、本質直観において与えられる本質は、知の形式によって変形させられた対象の性質にすぎない。真の実在的性質は、決して現前することはないのである。

しかし、だからといって、対象それ自体に迫ることが、不可能になるわけではない。たとえば、私たちはそれに「魅惑」されることで、対象に引き込まれることがある。「魅惑とは、ある対象の存在を、その性質の文字記述で置き換えることなく、暗示で表すこと」¹⁵を意味しており、それは間接的な仕方で、対象の実在を示唆する。そうして、本質の直観は、実在的性質の暗示に置き換えられる。

最後に、考察と課題を書いておく。

- (1) 対象の場合でも、本質の場合でも、ハーマンは、現象学から相関主義的性格を抜きとるような仕方で、議論を進める。そして、それが現象学の限界を突破する道である、と信じている。だが、その方法は、まだ十分に展開されていないように思われる。オブジェクトに迫る方法を間接的暗示と言ってしまうと、私たちは対象をどうにでも描写できる、ということにはならないだろうか。さらに言えば、どの記述が妥当なのかをいかに決められるのか。
- (2) 思弁的实在論の思考は、現象学とは逆向きに展開される。現象学は、実在的世界に関する判断を保留して、意識体験に向かうが、思弁的实在論は、意識体験だけでは不十分だと言って、実在的世界を復興する。しかし、よく考えてみれば、それが現象学を含む相関主義を批判する正当な理由になりうるのだろうか。現象学は認識論的動機から、あえてすべてを意識体験に還元するのである。
- (3) ハーマンの議論のなかには、フッサールがエポケーと還元を採用して、实在（超越）から意識（内在）に哲学的考察を限定した理由が見当たらない。その理由を一言

でいえば、相対主義と独断主義の対立を調停して、普遍認識を獲得するためであるが、ハーマンはむしろ、互いに対立する複数の理論が存立する状況を歓迎している。だとすれば、そもそも建設的な批判のための共通の地盤が成立していないのかもしれない。

※本稿は2019年度21世紀社会総合研究センター共同研究助成金による研究成果の一部である。助成金の応募を奨励してくださった金泰明教授と、21世紀社会総合研究センターのスタッフの方々のさまざまな支援に感謝する。

注

- ¹ 岩内章太郎「思弁的実在論の誤謬」、『フッサール研究』第16号、2019年、1-18頁。岩内章太郎「本体論の解体／復興」、『本質学研究』第7号、2019年、62-71頁。岩内章太郎『新しい哲学の教科書：現代実在論入門』、講談社、2019年。
- ² カンタン・メイヤサー『有限性の後で：偶然性の必然性についての試論』千葉雅也／大橋完太郎／星野太訳、人文書院、2016年、15-16頁。
- ³ ピュロン主義と現象学におけるエポケーの違いについては、以下で論じた。岩内章太郎「判断保留と哲学者の実践：ピュロン主義と現象学」、岡田聡／野内聡編『交域する哲学』、月曜社、2018年、27-42頁。
- ⁴ エトムント・フッサール『イデーニI-I』渡辺二郎訳、みすず書房、1979年、21頁。
()は筆者による補足。
- ⁵ 現象学的還元の着想以前の著作である『論理学研究』第二巻でも、フッサールは以下のように述べている。「意識を超越した《心的》および《物理的》^{レアリチーテン}実在をわれわれが^{アンネーメン}想定する権利の問題、つまりそれらの実在に関する自然科学者の言表は現実的な意味に理解されるべきか、それとも非本来的な意味に理解されるべきであるか、現出する自然、すなわち自然科学の相関者たる自然に、さらに第二のいっそう高次の意味での超越的世界を対置することに意味と正当性があるかどうか、等々の問題は純粹認識論とは別の事柄である。《外界》^{エクジステンツ ナトゥール}の実在と本性の問題は形而上学の問題である。認識する思考作用のイデアの本質と妥当の意味についての普遍的解明としての認識論は確かに、それら諸対象を認識する諸体験にとって原理的に超越的な、物的に《リアルな》諸対象についての知識ないし理性的推測が可能であるかどうか、またどの程度まで可能であるか、またそのような知識の真の意味はどのような諸規範に適合していなければならないか、というような普遍的問題を包括してはいるが、しかし、われわれ人間はわれわれに事実的に与えられた与件に基づいてそのような知識を現実獲得しうるかどうか、というような経験的方向の問題は含んでおらず、ましてこの知識を実現す

る課題は含んでいない」。エドムント・フッサール『論理学研究2』立松弘孝、松井良和、赤松宏訳、みすず書房、1970年、27頁。

⁶ Tom Sparrow, *The End of Phenomenology: Metaphysics and the New Realism*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 2014, p. 29.

⁷ グレアム・ハーマン『四方対象：オブジェクト指向存在論入門』岡島隆佑監訳、人文書院、2017年、40頁。

⁸ 同上、37頁。

⁹ 同上、43頁。

¹⁰ 同上、44-45頁。

¹¹ 同上、47頁。

¹² 前掲、『イデーンI-II』、64頁。

¹³ 前掲、『四方対象』、49頁。

¹⁴ グレアム・ハーマン『思弁的實在論入門』上尾真道／森元斎訳、人文書院、2020年、193頁。

¹⁵ 同上、194頁。